

# 学生の視点から見た 国際理解教育コースカリキュラム

石井由理

Students Views of the Programme of Kokusai Rikai Kyoiku  
[Education for International Understanding] Course

Yuri Ishii

(Received November 6, 2001)

## 1. はじめに

1996年の大学改革に伴って教育学部でも4課程7コースへの変更が行われ、初等教育教員養成課程の中に国際理解教育コースが誕生した(山口大学50年史編集委員会、1999、221)。このコースも2001年度で既に6年目を迎え、卒業生も2回送り出している。

一方で、2002年から実施される新教育課程では、文部科学省は、国際理解教育を「総合的な学習の時間」での実践を期待されている分野の第一にあげている(教育課程審議会、1998、21)。これによって、従来国際理解教育には与えられていなかった実践のための時間は、かなりの程度確保されることになる。少なくとも次の教育課程改訂が行われるまでのおよそ10年間は、国際理解教育は、日本の学校教育の中で重要な位置を占める分野と見なされるのである。<sup>1</sup>

このような理由から、本稿では、今後の教員養成課程における国際理解教育の在り方を考える足がかりとすべく、国際理解教育コースの6年間の成果の評価を試みる。評価の中心となるのは、コース設置時に目指したものがどの程度達成されているか、学生達が本コースに求めた教育をどの程度提供できているか、の2点である。これら2点について、卒業生を含めた本コースの学生に対して行った質問紙調査をもとに考察する。

## 2. 国際理解教育コースの目的とカリキュラム

国際理解教育コース設置の目的は、「(1) コース及び学部全学生への国際理解教育を通して、急激に変化し多様化する国際社会の諸情勢並びに日本の国際化に対して、適確に対応できる人材を養成すること。(2) このコースの学生には、実践的英語能力特にコミュニケーション能力を修得させ、国内外を問わず国際的な教育場面で活躍できる人材を養成すること。更に、(3) 2002年から導入される予定の、『国際理解教育の中での小学校英語』も担当できる教員を養成すること」(山口大学50年史編集委員会、1999、221)である。以下の表は、国際理解教育コースのコース指定科目である。右端の欄の(1)から(3)は、それぞれの科目について、上記の3つの目的のうち、内容から考慮して最も関連が深いも

のを示している。

国際理解教育コースの学生は、小学校免許を取ることが卒業条件となっているため、コース指定科目は、小学校教師になるための教育に加えて、学生が身につけることを期待されている内容のものである。下の表からわかることは、通常の小学校教師養成教育に加えて国際理解教育コースの学生の付加価値と考えられているのは、英語によるコミュニケーション能力、日本語、英語の語学教授能力、異文化および異文化理解に関する知識、態度、体験である。目的（1）に述べるところの「多様化する国際社会の諸情勢、日本の国際化」は、文化の多様性を焦点として考えられており、国際関係論のような政治・経済分野はほとんど含まれていない。よって、コース修了者が送り出される市場として想定されているのは、国際公務員ではなく、異文化の中で小学校の授業を英語によって行う、日本の小学生に英語国の文化的背景を考慮しながら英語を教える、あるいは、文化的背景の違う学習者に日本語を教える、などの仕事である。

#### 国際理解教育コース コース指定科目（1996年～1999年）

教育環境形成論	教育環境形成概論	(1)
	教育環境形成実習	(1)
日本語教育論	日本語学概論	(2)
	語学教授法	(2)、(3)
	語学教育実習	(2)、(3)
	国際理解教育概論	(1)
	異文化理解教育概論	(1)
国際理解教育論	国際交流実習Ⅰ	(1)、(2)
	国際交流実習Ⅱ	(1)、(2)
	異文化学習論	(1)
	異文化理解教育演習	(1)
	異文化学習演習	(1)
文化比較基礎論	比較文化学	(1)
	異文化間コミュニケーション	(1)
外国語実習	オーラルⅠ	(2)、(3)
	オーラルⅡ	(2)、(3)
	オーラルⅢ	(2)、(3)
	英語演習Ⅰ	(2)、(3)
	英語演習Ⅱ	(2)、(3)
	英語圏文化論Ⅰ	(1)
	英語圏文化論Ⅱ	(1)

上記のうちから必修を含め16単位以上の修得が求められている。

国際理解教育コース コース指定科目 (2000～2001)

語学教育論	語学教授法	(3)
	語学教授法演習	(3)
国際理解教育論	国際理解教育概論	(1)
	異文化体験実習Ⅰ	(1)、(2)
	異文化体験実習Ⅱ	(1)、(2)
	国際理解教育基礎	(1)
	国際理解教育演習	(1)
	教育環境形成論	(1)
異文化理解論	異文化学習論	(1)
	欧米文化論Ⅰ	(1)
	欧米文化論Ⅱ	(1)
	アジア・アフリカ言語文化入門	(1)
	異文化学習演習	(1)
外国語実習	英語コミュニケーション	(2)、(3)
	オーラルⅠ	(2)、(3)
	オーラルⅡ	(2)、(3)
	ライティング	(2)、(3)

上記のうちから必修を含め18単位以上を修得することが求められている。

次に、実際に卒業した学生たちはどのような仕事についているのか、また、現在在学中の学生も含め、国際理解教育コースに何を期待して入学してきたのか、コースはそれに答えられているのかを、学生に対して行った質問紙調査の結果をもとに見ていく。

### 3. 学生による評価

学生に対する質問紙調査は、2001年10月10日から25日の間に、卒業生、在校生ともに行われた。質問内容は、卒業生、在校生の学年によって多少異なる。

卒業生は1999年度が7人、2000年度が12人(うち9月卒業1人)、2001年度9月卒業1人の計20人である。在校生は4年生10人(うち2人は留学中で不在)、3年生12人(うち1人が留学中で不在)、2年生12人、1年生10人の計44人で、卒業生と在校生の合計は64人である。回答は1999年度卒業生4人、2000年度卒業生9人、4年生3人、3年生5人、2年生6人、1年生7人の計34人から得られた。回答は全て記名で、記述式である。

#### 3-1. 卒業生からの回答(複数回答あり。( )内は人数。)

##### 1. 国際理解教育コースに入学した理由は何でしたか。

- ・小学校の免許以外に中学校、高等学校英語の免許が取得できるため。(3)
- ・小学校の教員免許を取得するため。(3)

- ・異文化・外国に関心があったから。(3)
- ・留学するため。(2)
- ・英語が好きであったこと。(2)
- ・「国際理解」ということばに対する好奇心。(2)
- ・海外に興味があり、青年海外協力隊に参加したいと考えていたため。(1)
- ・高校の成績。(1)
- ・国立であること。(1)
- ・一人暮らしができること。(1)
- ・教育学部であること。(1)
- ・小、中、高の免許がとれること。(1)
- ・英語ではない点。(1)
- ・国際理解教育が重要になり、求められる分野であると思ったため。(1)
- ・教科よりも幅広く学べると思った。(1)
- ・国際関係のことを学べると思った。(1)
- ・発展途上国で初等教育の普及に携わる教師になりたかった。(1)

## 2. どこで国際理解教育コースの情報を得ましたか。

- ・高校の進路相談室(赤本)。(3)
- ・高校の進路指導室内の山口大学パンフレット。(2)
- ・雑誌。(2)
- ・高校の担任の先生から。(2)
- ・全国大学一覧表。(2)
- ・パソコンの検索で「国際」を入力。その後大学のパンフレット。(1)
- ・オープンキャンパス。(1)

## 3. その情報にはどのようなことが含まれていましたか。

- ・小学校免許(9)、中学校免許(7)、高校免許(2)が取れる。
- ・受験に関する情報。(3)
- ・英語の免許がとれる。(3)
- ・留学制度があること。(3)
- ・異文化理解、異文化間コミュニケーション。(2)
- ・詳しくは書かれていなかった。(1)
- ・小学校の授業で英語を取り入れるような状況に対応できる。(1)
- ・外国人の先生に習っている授業風景の写真。(1)
- ・授業風景の写真。(1)
- ・授業内容。(1)

## 4. その内容から、何が学べる所だと思いましたか。

- ・英語。(4)
- ・小学校教員になるための知識。(3)
- ・外国のことについて。(2)
- ・海外で働くための知識。(1)
- ・外国語。(1)
- ・様々な国の文化について学べ、英語以外の言語も学べる。(1)
- ・コースの内容は充実していなかった。(1)
- ・当時の自分には「これが学べる」ということは伝わらなかった。(1)
- ・海外子女教育。(1)
- ・外国の文化に触れ、外国人と交流ができる(学ぶということを考えず、異文化体験ができる所だと思った)。(1)
- ・教育のみならず、社会学、政治学、歴史学などの分野を学習できると思った。(1)
- ・国際関係。(1)

5. 入学後、4を学ぶことはできましたか。理由と共に書いてください。

はい(5)

- ・コースの研修旅行で外国の衣・食・住、人との交流を体験した。(2)
- ・留学ができた。(1)
- ・教育学部では高校までの教科を引き続き学べると思っていたので。(1)
- ・英語に関して多方面から学べた。(1)
- ・予想以上のことを学べた。(1)

十分ではないができた。(3)

- ・十分でないのは自分の意欲の問題と、教員養成の授業が中心となるため。(1)
- ・思っていたほど広範囲の文化については学べなかった。(1)
- ・英語以外の言語については、小学校関係の授業と重なることが多く、取れなかった。(1)
- ・海外子女教育を重点的に学ぶことはなかったが、幅広く学び体験できた。(1)
- ・専門以外の授業で学んだ。国際理解の外国語は手段であって、知識として学ぶのではないと知った。(1)
- ・教職課程については学べたが、専門については自分の身につけなかった。(1)
- ・講義は準備されていたが自分の意識・努力が不足していた。(1)

いいえ(2)

- ・Native Speakerによる授業は少なく、受動的な授業だった。(1)
- ・募集要項から得た印象と実際が異なっていた。高校生に理解させるのは難しい。(1)

6. 卒業後にどのような仕事に就こうと思っていましたか。

- ・教員。(10) (小学校教員7、中学校教員1)
- ・塾の講師。(2)
- ・英語を使う仕事。(2)

- ・営利ではない、人を相手にした仕事。(1)
- ・教育の勉強ができる仕事。(1)
- ・警察官。(1)
- ・こどもと関われる仕事。(1)
- ・情報関連の企業。(1)
- ・青年海外協力隊。(1)
- ・事務。(1)
- ・発展途上国の小学校教師。(1)

7. 在学中に履修したコース指定科目  
省略

8. あなたの現在の職業は何ですか。

- ・小学校非常勤講師。(3)
- ・英語講師。
- ・英語教師。(中学校、臨時採用)
- ・経理・秘書。
- ・教諭(高校)。
- ・大学院生。
- ・教員の臨時採用待ち。(1)
- ・公立小学校で外国籍児童に日本語指導。(1)
- ・学生。(1)
- ・会社員。(1)
- ・パートタイマー。(1)

9. 履修したコースのうち、現在のあなたの仕事上、役に立っているものはどれですか。  
(回答者別にまとめてある)

スキル：

- ・異文化理解教育概論、異文化理解教育演習、国際交流実習Ⅰなど、参加型のもの。実際に自分達でやってみたのがよかった。(2) 日本語学概論、語学教授法(日本語)、国際交流実習Ⅰ。
- ・小学生を対象とした英会話教室なので、文法、構文中心の方法では役立たない。これらの授業で話す言葉の授業方法を体験したので役立っている。
- ・なし。(わからない1を含む)(11)

知識：

- ・国際交流実習Ⅱ(2)  
英語も国によって特徴がある。外国の様子を伝えられる。  
現地で得ることができた知識。
- ・英語圏文化論Ⅰ、Ⅱ  
言語を教えるときにはその国の文化や習慣も一緒に教える必要があるから。

- ・国際交流実習Ⅰ  
いろいろな知識をもった後に再度このような実習があるとよい。
- ・異文化学習演習  
世界にある様々な文化や時代を背景とした人々の違いを学んだ。
- ・国際理解教育概論  
大学院で学んでいることにつながっている。
- ・授業全体を通して知識になった。(自分の中のステレオタイプ、様々な価値観、相互理解、共生など)
- ・なし。(5)

態度・価値観：

- ・国際交流実習Ⅱ(2)  
村でのホームステイを通して、家族や地域の団結や助け合いの態度を学んだ  
こどもやPTA誌に自分の体験を話したり連載したりしている。
- ・国際理解教育概論、異文化理解教育概論、国際交流実習Ⅱ  
同僚や生徒、保護者と話す時に役立っている。
- ・異文化理解教育概論、国際交流実習Ⅱ  
外国人と交流することで様々な考えの存在を知った。「自分が絶対ではない」ことに気づかされたこと。世界を公正に見ることができるようになった。日本は外国ではどのように意識されているか、固定観念はかならずしもあっているわけではないこと。
- ・異文化学習論、異文化理解教育演習  
こどもたちを多面的にとらえようとする態度、外国人児童などに対する関わりにおいて、役に立っている。ジェンダーについて学んだので、「男の子だから」「女の子だから」という言葉を指導上使わないように意識するようになった。
- ・教育環境形成概論、国際理解教育概論、異文化学習論、異文化教育概論、異文化理解教育演習、国際交流実習Ⅰ,Ⅱ、異文化間コミュニケーション  
相手の考えを否定せずに話し合おうとする態度が身についた。いろいろな視点で物を見るためにいろいろな人の意見を聞くようにしています。
- ・国際交流実習Ⅰ,Ⅱ  
言葉が同じでなくてもコミュニケーションはとれる。日本には作れない境界みたいなものを作れた。
- ・なし(6)

10. 現在の生活上役に立っているものはどれですか。

スキル：

- ・国際交流実習Ⅱ  
この経験はどんな世界でも生きていける自身をつけてくれた。
- ・なし(12)

知識：

- ・ 国際交流実習Ⅱ（２）  
固定観念の固まりだったが、真実はどうなのかを少し知ることができた  
カルチャーショックとはどういうものか。海外から見た日本はどういうものか。
- ・ 異文化理解教育概論  
情報を見る時には批判的に見るように心がけている。
- ・ 異文化学習論、異文化理解教育概論、国際交流実習Ⅰ  
メディアのからくりを知ることで、テレビなどの見方が変わった。ドイツのゴミリ  
サイクルの話が印象に残っている。
- ・ 異文化学習演習  
世界の多様性について、興味が広がった。
- ・ なし（８）

態度・価値観：

- ・ 国際交流実習Ⅱ  
自分の考えを相手にはっきり言うことの大切さ、様々な価値観、リサイクルをす  
るようになった。
- ・ 国際交流実習Ⅰ,Ⅱ  
言葉が通じなくてもコミュニケーションできるという体験から、どんな状況下で  
もどうにかなる自信がついた。
- ・ 海外ニュースに関心を持ち、自分の意見が持てるようになった。
- ・ (コース全体として) 固定観念にとらわれないようになった。
- ・ 異文化学習論、異文化理解教育概論、異文化理解教育演習  
外国映画やドラマを見る時に人権への配慮に注目するようになった。まわりの人  
の発言にも敏感に反応するようになった。マレーシアの森林伐採、富、食糧など、  
世界でおこる諸問題を様々な角度でとらえるようになった。
- ・ 国際理解教育概論、異文化学習論、異文化間コミュニケーション、国際交流実習Ⅰ,Ⅱ、  
比較文化学  
自分とは異なる考え方、事情を念頭において客観的に見られるようになったし、  
自分に素直に生きることへの意識が高まり、自分の望む暮らし方への考えに影響  
を与えた。
- ・ わからない
- ・ なし（６）

11. 9・10以外の面で役にたっているものを書いてください。

- ・ 国際交流実習Ⅱ（２）  
実際にその国に行って生活してみて、そこに住む人々と触れ合えたことは、貴重。  
考え方、見方が以前よりも多様になった。  
マレーシアでのホームステイで、偏見にとらわれる無意味さに気づくことができ  
た。個人的なつながりのある国には悪い印象をもつことは難しいので、このよう  
な機会が増えれば、戦争もおこらないのと思う。
- ・ 国際交流実習Ⅰ



参加者と今だにe-mailの交換をしている。

・語学教授法

自分の意見を持って良いのだということを学び、自信をもつことができた。

・国際交流実習Ⅰ,Ⅱ

ことばが通じなくても何とかなる自信。

・語学教授法（日本語、英語）、語学教育実習（日本語、英語）、異文化学習論、国際交流実習Ⅰ,Ⅱ

一つの分野の中にもいろいろあることを知り、いろいろな方向から見るということをするようになった。コミュニケーションの大切さを学んだ。

・国際理解教育コースの授業はどれも人間性・価値観を成長させるうえで関連性のあるものだった。一つではなく、様々な授業を受けることに意義がある。学んで無駄な授業はなかった。（２）

・なし（５）

12. 大学を卒業する時点で、あなたが入学時にもっていた、大学でやろうと思っていた目的は達成されましたか。

13. 12の理由

はい（４）

・留学できた。（２）

・物事をいろいろな角度から見ることを学び、自分のやりたいことを見つけられた

・免許を取れた。

いいえ（６）

・留学できるだけの英語を自分で勉強しなかった。（２）単位を取るために授業に出ていた。

・海外についての知識を増やし、留学生と交流するなど、具体的な活動をできなかったから。

・免許取得はできたが、自分の人間性の形成は理想には届かなかった。しかし、道標は与えてくれた。

・自分に目的がなかった。

・自分の意欲、努力不足。

どちらでもない（２）（目標を持っていなかった ２）

どちらとも

・いろいろな資格を取ることができた一方、留学ができなかった。行こうと思った時には留年をしないと行けない学年だったのであきらめた。

14. 12で「いいえ」と答えた人は、授業がどのような内容であつたら達成できたと思いますか。

・少人数制で、学生が主体的にならねば成り立たない授業。（２）

・留学生と共に生活するもの。（２）

・心理学系の授業。（２）

- ・講義ばかりでなく、授業内で学生のプレゼンテーションの時間やワークショップがあればよい。(1)
- ・読み書きに関する英語の授業の課題がもっと重い方がよい。(1)
- ・個人の意欲や努力が要求される内容。(1)
- ・主体的に参加できる英語の授業。(1)

## 15. その他

- ・国際理解教育というのは幅が広いと思う。さらに、教員免許を目指すと内容が浅薄になってしまう。免許取得をすることは「国際理解教育が専門です」と胸を張っていえる自信にはつながらない。ゼロ免ではないのが売りなので、免許は必要だが、国際理解教育を広く浅くではなく、その中の一分野を深めていくことが有意義である。入学時から卒論を見据え、個人の担当教官を早期から持ち、チュートリアルを行うシステムができればいい。
- ・コースで学んだことや取得した免許等は学校においてとても役立ち、有意義である。このコースを選んだことをうれしく思う。
- ・実際に仕事に使うわけでもなく、日常生活に役立っていると感じたことはないが、4年間で学んだことは自分の考え方、感じ方に影響を与えており、自分のためになっている。
- ・国際理解教育が専門にもかかわらず、授業数が少なかったのが残念だった。参加型授業は、刺激的で、頭ではなく心で理解することができるような授業だった。
- ・国際理解教育を始められるだけの知識やスキルをもった人材はなかなかいないのが現状。英語が話せるのも一つの武器であるし、海外・異文化体験があるというのも大きな武器となる。在校生にも現場で求められている人材だということを知ってほしい。さらにいえば、より具体的な指導法、実践に関するものがあればよい。雑誌にのっていた国際理解教育コースでは、児童英語の勉強ができることになっているが、これはどの授業でできたのか、と思う。
- ・実際に役にたっているものをあげるのは難しいが、どの授業も刺激が得られた。

## 3-2. 在校生の回答(問1-4は全学年の回答をまとめた)

### 1. 国際理解教育コースに入学した理由は何でしたか。

- ・小学校免許がとれる。(7)
- ・英語を学べる。(6)
- ・国際理解という分野に興味。(5)
- ・小学校で英語を教えることに興味。(5)
- ・中、高の英語の免許がとれる。(4)
- ・国際関係に興味。(3)
- ・留学ができる。(2)
- ・推薦入試で受かったから。(2)
- ・海外研修がきる。(2)
- ・高校の先生の紹介。(1)
- ・異文化について学べる。(1)

・入試の結果 (1)

2. どこで国際理解教育コースの情報を得ましたか。

・山口大学の案内。(9)

・大学受験情報誌。(8)

・高校。(4)

・ホームページ。(4)

・進研ゼミ。(2)

・高校の担任。(2)

・教育学部のパンフレット。(1)

3. その情報には、どのようなことが含まれていましたか。

・取得可能免許の種類。(18)

・学べる内容。(12)

・マレーシア・シンガポール研修旅行。(6)

・留学できる。(2)

・小学校での英語教育ができる教員養成をしている。(1)

・小学校で始まる国際理解教育のこと。(1)

・国立大学の中で始めて国際理解教育コースが開設された。(1)

・大学卒業後の進路。(1)

・入学者・合格者人数。(1)

4. その内容から何が学べるところだと思いましたか。

・国際事情・異文化。(8)

・英語。(7)

・小学校での教育。(7)

・異文化理解のための英語教育の必要性。

・国際関係。(4)

・教育に関すること。(3)

・わからなかった。(1)

・発展途上国の諸問題。(1)

・国際的視野を持った教師の育成。(1)

・英語教育。(1)

5. 入学後、4を学ぶことはできましたか。

1年生回答

はい(5)

いいえ(2)

・まだ共通教育がほとんどだから

2年生回答

はい(5)

- ・授業でも研修旅行でも学んでいる。(2)
- ・教育全体に関して、初等科の授業で学べた。
- ・国際関係ではないが、文化についての視点が変わった。
- ・英語の授業も多く、留学情報も多い。

いいえ(1)

- ・ほとんど大学へ行っていなかったため、関心が持てないため。

3・4年生回答

はい(6)

- ・英語一種免許を取るための授業と国際理解教育に関する授業が豊富にあり、よい経験ができた。
- ・研修旅行、留学で生の異文化を学び、勉強になった。
- ・その内容の授業があるから。
- ・専門科目ではなく、学部全体の授業で学んでいる。
- ・しかし、まだ少ないとも思う。

いいえ(1)

- ・文学や英文法の英語専門に焦点が当てられたカリキュラムであり、異文化理解教育の専門授業が少ない。

どちらとも

- ・英語教育、小学校教育については学べたが、国際理解教育は具体的な授業が少なく、専門性が低い。

6. 入学時点で、卒業後にどのような仕事に就こうと思っていましたか。(1-4年回答)

- ・小学校教師。(12)
- ・教師。(3)
- ・国際関係の仕事。(3)
- ・英語教師。(2)
- ・高校教師。(2)
- ・日本語教師。(1)
- ・中学校教師。(1)

7. 省略

8. 教育分野に限らず、上記以外に学びたいと思っている分野があったら書いてください。(1-4年回答)

- ・国際関係論。(5)
- ・社会心理学、心理学。(3)
- ・開発教育。(1)
- ・宗教。(1)
- ・国際政治。(1)
- ・学級崩壊。(1)

- ・ 家族。(1)
- ・ こどもの環境。(1)
- ・ 経済学、経営学。(1)
- ・ 小学校の現状。(1)
- ・ 国際社会における日本語。(1)
- ・ 比較教育。(1)
- ・ 環境。(1)
- ・ 国際貿易。(1)
- ・ 児童英語の教授法。(1)
- ・ なし。(4)

9. あなたが現在就きたいと思っている職業は何ですか。(1 - 4年回答)

- ・ 小学校教員。(9)
- ・ 中学校英語教員。(3)
- ・ 国際関係。(3)
- ・ 教員。(2)
- ・ 高校教員。(1)
- ・ 通訳。(1)
- ・ アナウンサー。(1)
- ・ 英語教師。(1)
- ・ 迷っている。(4)

10. その仕事にはどのようなスキル、知識、態度が必要だと思いますか。(1 - 4年回答)

- ・ 外国語。(10)
- ・ 幅広い知識。(9)
- ・ 教授法。(8)
- ・ こどもを引き付け、理解し、こどもに共感できる、可能性を引き出す。(5)
- ・ 柔軟なもの見方。(5)
- ・ 人を平等にみる。(4)
- ・ 寛容。(4)
- ・ コミュニケーション能力。(3)
- ・ 異文化理解。(2)
- ・ 好奇心、向上心。(2)
- ・ 忍耐力。(2)
- ・ 国際関係の知識。(2)
- ・ 自分なりの価値観。(2)
- ・ 愛情。(1)
- ・ 日本語。(1)
- ・ 協調性。(1)
- ・ 全体を見る力、個々を見る力。(1)

11. コース指定科目の中に10を身につけるのに役立つものがありますか。

1年生回答

スキル：

- ・英語コミュニケーション（旧国際交流実習Ⅰ）。（6）
- ・新入生セミナー。（3）
- ・なし。（1）

知識：

- ・新入生セミナー。（7）
- ・英語コミュニケーション。（1）
- ・異文化体験実習Ⅰ（旧国際交流実習Ⅰ）。（1）

態度・価値観：

- ・新入生セミナー。（4）
- ・英語コミュニケーション。（2）
- ・異文化体験実習Ⅰ。（2）
- ・なし。（1）

2年生回答

スキル：

- ・英語コミュニケーション。（4）
- ・異文化体験実習Ⅱ。（2）
- ・異文化学習論。（1）
- ・語学教授法。（1）
- ・アジア・アフリカ言語文化入門。（1）
- ・なし。（1）

知識：

- ・国際理解教育基礎。（2）
- ・英語コミュニケーション。（2）
- ・欧米文化論Ⅰ。（2）
- ・異文化体験実習Ⅰ。（2）
- ・国際理解教育概論。（2）
- ・アジア・アフリカ言語文化入門。（1）
- ・異文化学習論。（1）
- ・異文化体験実習Ⅱ。（1）
- ・教育環境形成論。（1）
- ・なし。（2）

態度・価値観

- ・異文化学習論。（4）
- ・異文化体験実習Ⅱ。（3）
- ・国際理解教育概論。（2）
- ・異文化体験実習Ⅰ。（2）
- ・英語コミュニケーション。（1）

・なし。(1)

3・4年生回答

スキル：

- ・国際交流実習Ⅱ。(3)
- ・国際交流実習Ⅰ。(3)
- ・語学教授法(英語)。(2)
- ・語学教授法(日本語)。(1)
- ・語学教育実習。(1)
- ・なし。(1)

知識：

- ・異文化学習論。(4)
- ・異文化理解教育概論。(4)
- ・語学教授法(英語)。(4)
- ・教育環境形成概論。(2)
- ・国際理解教育概論。(1)
- ・異文化理解教育演習。(1)

態度・価値観：

- ・国際交流実習Ⅱ。(6)
- ・異文化学習論。(3)
- ・異文化理解教育概論。(3)
- ・国際交流実習Ⅰ。(3)
- ・なし。(1)

12.現在のあなたの生活上、役に立っているものはどれですか。

1年生回答

スキル：

- ・英語コミュニケーション。(4)
- ・なし。(3)

知識：

- ・新入生セミナー。(3)
- ・異文化体験実習Ⅰ。(2)
- ・英語コミュニケーション。(1)
- ・なし。(3)

態度・価値観：

- ・新入生セミナー。(2)
- ・英語コミュニケーション。(1)
- ・なし。(5)

2年生回答

スキル：

- ・英語コミュニケーション。(1)
- ・国際理解教育概論。(1)
- ・異文化学習論。(1)
- ・異文化体験実習Ⅰ。(1)
- ・国際理解教育基礎。(1)
- ・異文化体験実習Ⅱ。(1)
- ・なし。(5)

知識：

- ・異文化学習論。(1)
- ・国際理解教育基礎。(1)
- ・なし。(5)

態度・価値観

- ・異文化学習論。(3)
- ・国際理解教育基礎。(1)
- ・国際理解教育概論。(1)
- ・異文化体験実習Ⅰ。(1)
- ・異文化体験実習Ⅱ。(1)
- ・なし。(3)

### 3・4年生回答

スキル：

- ・国際交流実習Ⅱ。(2)
- ・国際交流実習Ⅰ。(1)
- ・なし。(4)

知識：

- ・語学教授法（英語）。(1)
- ・国際理解教育概論。(1)
- ・異文化学習論。(1)
- ・異文化理解教育概論。(1)
- ・異文化理解教育演習。(1)
- ・異文化間コミュニケーション。(1)
- ・国際交流実習Ⅱ。(1)
- ・なし。(7)

態度・価値観

- ・国際交流実習Ⅱ。(5)
- ・異文化学習論。(4)
- ・異文化理解教育概論。(4)
- ・国際交流実習Ⅰ。(3)
- ・異文化学習演習。(2)
- ・語学教授法（日本語）。(1)
- ・語学教育実習（日本語）。(1)



- ・異文化間コミュニケーション。(1)
- ・全体を通して、異文化の人と平等に接しようとすることを学んだ。(1)
- ・なし。(2)

13. 上記以外の面で役立っていることがあったら書いてください。

1年生回答

- ・新入生セミナー。(1)
- ・英語コミュニケーション。(1)
- ・なし。(6)

2年生回答

- ・異文化学習論。(1)
- ・異文化体験実習Ⅰ。(1)
- ・異文化体験実習Ⅱ。(1)
- ・なし。(4)

3・4年生回答

- ・国際交流実習Ⅱ。(1)
- ・なし。(7)

14. 大学を卒業する時点で、あなたが入学時に持っていた、大学でやろうと思っていた目的は達成できると思いますか。

15. 14の理由

1年生回答

はい(6)

- ・目標を達成したい。(2)
- ・免許が取れる。(2)
- ・大学は自分のやりたいことができる。
- ・教育、英語教育について学べるはず。
- ・学年があがれば専門も学べるから。

わからない(1)

- ・理由なし。

2年生回答

はい(3)

- ・やりたいことを見つけたい、という目標は達成できそう。
- ・夢に近づいていっている。
- ・専門の授業で学ぶ内容が有益。

いいえ(2)

- ・留学をしようと思っていたが、英語の勉強をしなくなってしまった。
- ・教員採用試験突破の実力が卒業までにつきそうにない。

どちらも（１）

- ・達成できるものもあるが、もっと知りたいことが増えていきそう。

３・４年生回答

はい（８）

- ・入学時の目標は漠然と教師になりたいだけだったので、その点では達成できるが、その後学んだことを深めるには時間がない。（２）
- ・自分の目標、課題が持てた。
- ・単なる英語の勉強ではなく、それをとり囲む環境について学び、外国人と交流できた。
- ・小学校免許が取れる。
- ・授業がたくさん用意されている。
- ・学びたいことは学べた。

16. どのような授業であれば達成できると思いますか。

- ・授業ではなく、自分自身の問題。（２）

17. コースを魅力的にするには、他にどのような授業が必要だと思いますか。

1年生回答

- ・英語コミュニケーションのような授業。（３）
- ・留学生や外国人との交流。（２）
- ・国際関係論。（２）
- ・異文化を知る機会。（１）
- ・小グループで様々なテーマについて調べ、討議する。（１）
- ・個々人が参加できて英語力が高められる授業。（１）

2年生回答

- ・家族について。（１）
- ・親について。（１）
- ・こどものまわりの環境。（１）
- ・教育系の授業を増やす。（１）
- ・外国人教授、講師を増やす。（１）
- ・留学生との交流。（１）
- ・英語を話す授業を増やす。（１）
- ・なし。（１）

３・４年生回答

- ・留学生との交流。（３）

- ・心理学の面。(1)
- ・英会話。(1)
- ・異文化に関するだけでなく、実際の教え方を実践できるもの。(1)
- ・時事外国問題。(1)
- ・パソコンの使い方。(1)
- ・国際交流実習Ⅰのような活動系の授業。(1)
- ・いろいろな視点をもった先生の授業。(1)
- ・英語の免許のためにあまり国際理解教育の授業を受けられなかった。(1)
- ・日本語の語学教授法を続けてほしい。(1)
- ・国際交流実習Ⅱを続けてほしい。(1)
- ・英語だけでなく国際理解の授業を増やす。(1)
- ・体験・経験できる授業。(1)

## 18. その他

### 1年生の回答

- ・授業でもっと話せる英語を教えてほしい。

### 2年生の回答

- ・入学するまで、国際理解教育についてよく知らなかった。徐々に知ることができたが、自分ではうまく説明できない。もっと勉強していきたい。
- ・海外研修で考え方や人生が変わる人もいると思う。
- ・入学案内やホームページでもっと詳しく説明してほしい。他コースとの違いもはっきり明示してほしい。
- ・小学校の専門の授業を受けると、授業をすることの難しさを感じて不安になる。

### 3・4年生の回答

- ・小学校教員として国際理解に関して他の人よりは知識があるが、中途半端である。総合的な学習の中での位置づけはどうか。
- ・海外研修はよい企画であるが、さらに計画の時点からホームステイ先や訪問先を決めて検討していくべき。

## 4. 考察

今回の質問紙調査に応じた学生は、全体の55%である。質問紙調査に積極的に応じた学生の回答にデータが偏っているという点で、調査に既に誤差が入っていることは否めない。応じなかった学生が全く異なる意見を持っていることは、充分考えられるからである。授業科目に関しても、全員必修の科目がある一方で、選択でしかも卒業に関する限りは取らなくてもよい時期に開講されている科目もある。また、クラスの規模も様々であり、一律に論じることとはできない。以上のような限界を認識したうえで、得られたデータに限定した考察を試みる。

コース設置時に目指したものは、どの程度達成されているだろうか。卒業生12名のうち、教職についているのは臨時採用も含めて、英語教師1名、講師1名、日本語教師1名、小学校講師3名、高校教諭（英語）1名の計7名で、過半数である。これらの卒業生は、いずれも国際理解教育コース全体としての教育を比較的高く評価しており、児童英語、心理学など、改善点の指摘はあるが、本コースで学んだことが現在の仕事に活かされていると感じている。

活かされていることの一つとして彼らがあげているのは、語学教授法を含めて、参加型の学習を体験したことである。特に外国籍児童に日本語を教えている卒業生は、体験に基づいて、国際理解教育コース出身者の人材としての価値を強く主張しており、また、教えている中に外国籍児童がいる卒業生も、国際理解教育コースで学んだことが有効である点を指摘している。つまり、学習者が多様である場合、彼らにどのように対応していけばよいかを、国際理解教育を通して学べたと評価されている。また、コース全体を通して今の自分が形成されたと感じている卒業生もいるが、逆に、国際理解教育の範囲が広すぎて専門性に乏しく、これが自分の専門であるという自信を持ちにくいと考える卒業生もいる。現在教えているものの内容によっても、回答は異なるようである。

このように、想定した市場のうち二つには、既に卒業生を送り出している。この分野に進む学生に対しての今後の課題は、国際理解教育の授業内容自体よりも、正規採用される卒業生を増やすべく、教員採用試験合格率を上げることである。ユネスコ第18回総会で採択された『国際教育勧告』（1974）<sup>2</sup> や国際教育のための教育専門家会議で採択された『国際教育に関するカリキュラム、教科書、他の教材の開発、評価、改訂のための指針と基準』（1991）を見れば、国際理解教育は単独教科になることとは相容れない、学際的性質をもったものであり、学校カリキュラム横断型で取り入れられることが望ましいことが明らかであるし、実際、教育専門家会議の基準ではそのように明記している。よって、学校教育課程においても、独立した教科とはなりにくく、「専門」として自信を持ちたい学生の要望に応えるのは難しい。現状で、国際理解教育の知識、スキル、態度のみで教員採用の市場競争に勝てるとは考えがたいからである。

想定した市場のうち、まだ就職者が出ていないのが、海外を場とした教育職であり、これを市場に含めるならば、その可能性を高めるための策を具体的に探る必要がある。海外で誰に何を教えるのかによって、提供すべき訓練は異なるからである。

教職以外では、民間企業に勤めた者が2名、学生が2名、臨時採用待ちが1名、パートタイマーが1名である。このうち大学院進学者は海外教育援助について学んでおり、他の1名は福祉関係の専門学校に方向転換している。興味深いのは、これらのうち5名が、入学時に国際理解教育コースで学べると考えていたものと実際の内容が異なっていたと考えている点である。彼らが求めていたのは、国際関係論、海外子女教育、多くの外国語や文化など、現在の本コースが提供していないものであった。その結果として、全く異なる分野への就職や方向転換、国際理解を基にして国際教育援助を学ぶための進学、大学で学んだことへの充実感の欠落などが見られる。設置時点のように、教職のみを市場とする限り、このような希望を持つ学生のための教育は充分提供できない。教職以外に教育援助に携わる人間を養成していくのであれば、現在のカリキュラムは大幅な見直しを必要とすることになる。

次に、学生が求めるものをどの程度提供できているのかという観点について述べる。既

に卒業生の傾向にみられるように、学生の満足度は、個人の将来の希望は教職か否かによってかなり異なる。また、学年が上がるに従って満足度は上がる傾向にある。これは、各学年が国際理解教育をどのように理解しているか、に関係がありそうである。1年生の回答では、国際理解教育を英語、外国文化、国際関係であるにとらえていることが見て取れる。これに対し、上級生の回答では、国際理解教育を「教育」分野のものとして捉えていることがわかる。つまり、国際理解教育に対する理解が深まるに従って、学生が、自分自身の国際理解教育に対するイメージを修正するようである。再びユネスコの『国際教育勧告』を見れば、1年生がもっている英語、外国文化、国際関係のいずれもが、国際理解教育の中に含まれる。よって、教員養成課程であることを意識しなければ、彼らのもともと持っていた興味関心に応じた国際理解教育カリキュラムも、選択としてはあり得るのである。

次に、学生たちが共通して持っていた不満であるが、在校生、卒業生ともに共通していたことの一つは、英語学習において参加型、会話中心の授業が少なかったこと、Native Speakerによる授業が少なかったことである。この点は、2000年からの新カリキュラムにおいて、Native Speaker of Englishによる参加型の授業を半期増やすことによって、既に改善をはかっているが、小学校の教員免許取得を卒業条件とする限り、英語の授業をさらに増やすことには限界がある。改善の可能性としては、他のコース指定科目を英語で行うことがありうるが、これは逆に専門性をいっそう弱める結果を生むであろうし、英語以外の面に興味をもつ学生が犠牲になることになる。英語をやりたいから入学したという学生と、英語だけではないからこそ国際理解教育を選んだという学生の両方を抱える故のジレンマである。

学生が持っている二つ目の不満として、留学生との交流の少なさが指摘される。留学生は日本人学生のためにいるわけではなく、留学生本人のために日本にいるのであるから、将来の就職先となる可能性がほとんどない日本の小学校で教えるための免許は、不要である。よって、国際理解教育コースに入る留学生が少ないのは自明の理であるが、留学生の日本語・日本事情の学習と相互乗り入れのような形で、双方の充実を図ることはできないものであろうか。双方に得るところのある改善策を考える必要がある。

上記の課題の中には、今後の教育学部のあり方と関連が深いことも含まれている。国際理解教育は日本の学校教育の枠組みの中での国際理解教育に特化していくべきなのか、日本語教師など日本以外でも働ける分野や、教職以外の国際協力の分野で働ける人材養成へと広げていくべきなのか。教育学部が教員養成に焦点を合わせていくのか、教育を広く捉える方向を維持するのかによって、今後の国際理解教育コース、あるいは国際理解教育分野のカリキュラム内容も方向づけられることになる。

---

<sup>1</sup> ある要素が教育課程上重要であると見なされているかどうかは、それを導入するための時間が確保されているかどうかにも現れる傾向がある。小学校での道徳の導入、児童中心教育を生活科という時間の中に導入したことなどが例としてあげられる。詳細は、Ishii, Y. (1998) "The politics of curriculum change in Japan: a case study of the introduction of Seikatsuka" [Life Environment Studies], *Journal of Education Policy*, Vol.13, No.1, pp.27-40.

<sup>2</sup> 「国際理解教育」と「国際教育」の用語の違いについては、千葉果弘「ユネスコにおける国際理解教育の概念の変遷」中西晃（代表）『国際理解教育の理論的実践的指針の構築』

に関する総合的研究：平成7年度～平成9年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)研究成果報告書』11-44頁、を参照。

## 参考文献

教育課程審議会（1998）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」『学校運営研究9月号臨時増刊』485号、5-107頁。

千葉杲弘（1998）「ユネスコにおける国際理解教育の概念の変遷」中西晃（代表）『国際理解教育の理論的実践的指針の構築に関する総合的研究：平成7年度～平成9年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書』、11-44頁。

山口大学50年史編集委員会（1998）『山口大学50周年記念誌：通史』、山口大学。

ユネスコ（1974）「国際理解、国際協力および国際平和のための教育と、人権と基本的自由についての教育に関する勧告」堀尾輝久、河内徳子（編）（1998）『平和・人権・環境 教育国際資料集』青木書店、190-200頁。

ユネスコ（1991）「国際教育に関するカリキュラム、教科書、他の教材の開発、評価、改訂のための指針と基準」堀尾輝久、河内徳子（編）（1998）『平和・人権・環境 教育国際資料集』青木書店、352-365頁。

Ishii, Y. (1998) "The politics of curriculum change in Japan: a case study of the introduction of Life Environment Studies[Seikatsuka], *Journal of Education Policy*, vol.13, no.1, pp.27-40.